余白手帖

亜細亜の鼓動

（左から）パク・イヒョン（作曲担当）、ホン・ミンジン（プロデューサー）
ソ・ウォンジン（演出）、SAKATANI Hitoshi（演出）、チェ・ソンファ（俳優）
キム・ギョンファン（俳優）　　―稽古後、鍾路にて―

「2023 烏鵲橋プロジェクト」

そこに在るはずの貴方に ～空の川を越えて～

◆主催：2023 烏鵲橋プロジェクト
◆助成：公益財団法人日韓文化交流基金
◆後援：韓国文化芸術委員会、駐日韓国大使館韓国文化院
◆協力：劇団山、Creative Group Choc.24、株式会社 Envision Nextage
一般社団法人あおい文化交流研究所

２０２３年７月、東京で新たな七夕伝説が始まる――。韓国でさまざま演劇公演を企画制作してきた一人のプロデューサーの発案で始まった、韓国と日本の演劇人たちによる共同創作演劇「そこに在るはずの貴方に～空の川を越えて～」。七夕伝説をモチーフにしたこの作品は２０２２年に企画され、賛同した日韓の演劇人たちが、コロナ禍でまだ両国を行き来できない中、オンラインで打ち合わせを重ねながら実現したものだ。会えないもどかしさや紆余曲折を経た末に、この７月７日、七夕のまさにその日に、東京で初めての公演が幕を開ける。

ここに至るまでの長い道のりには、演劇活動を通して日本と韓国の架け橋となりたいと願う若い演劇人たちの、熱い思いがあった。韓国と日本、両国で誰もが知る七夕のロマンチックな物語を今の日韓関係になぞらえ、言葉の違いや文化の違いを乗り越えて、互いを知る、互いを認め合うというプロセスの大切さを彼らは教えてくれる。

多様な視点で作り上げられた、新たな伝説の世界をぜひ劇場で堪能してほしい。

A MARGIN OF LIFE VOL.6 2023.6

韓国と日本 少しちがう視点で 観客とともに
ホン・ミンジン、SAKATANI Hitoshi、ソ・ウォンジン

【連載】「風立ちぬ 東ジアの気象地図」第２回
元毎日新聞論説委員 元ソウル・バンコク支局長　下川正晴

古代のロマン「菟道稚郎子の死の謎３」
橋田惠子

BOOKS『朝鮮国民女優・文藝峰の誕生』
李瑛恩

発行人　あおい文化交流研究所
http://aobunlabo.or.jp/

そこに在るはずの貴方に　空の川を越えて

韓国と日本
少しちがう視点で
観客とともに

プロデューサー
ホン・ミンジン

「2023 烏鵲橋プロジェクト」

日本の皆さん、こんにちは。韓国の演劇プロデューサー、ホン・ミンジンです。

私はこれまで国際交流プロジェクトに高い関心を持ってきました。近くて遠い国といわれる韓国と日本ですが、そこには共通する文化があります。それを素材にして、両国が少しずつ違う視点で、観客と共にコミュニケーションを構築することができないだろうか。今回、私はそんな作業に挑戦してみたいと思いました。

「２０２３烏鵲橋プロジェクト」は韓国と日本の若い芸術家たちが出会い、互いの文化について学び、演劇ー芸術活動を通して両国の間に橋を架けようというプロジェクトです。韓国と日本の演劇人が、これまでできなかったさまざまな試みに挑戦したり、たとえ流暢ではなくても暖かく親しみを込めて語り合い、互いに行き来できるようになれたらという思いを込めて、今回のプロジェクトを始めました。

このプロジェクトは、韓国と日本のプロデューサー、演出家、創作陣、技術スタッフ、俳優たちがオン・オフラインを活用して、両国それぞれ、あるいは一緒に作り上げる共同創作活動です。両国でよく知られている「牽牛と織女（七夕）」を一味違う視線で、昔話とは異なるアプローチによって、現代の観客に出会おうという試みです。

韓国と日本は似ているようで、実はかなり異なる文化を持っています。

両国の演劇人たちが平凡な個人として、そして芸術家として出会い、思いのたけを時には熱くぶつけ合いながら、理解し合おうともがく中で、文化と芸術の力を強く感じました。芸術には世界を違った目で見る力があります。今回のプロジェクトを進めながら、これまで知らなかった近くて遠い国の日本の友達について知り、韓国人である私たちについても、また新たな発見がありました。違いを知り、同じであることを理解するとき、私たちはまた別の芸術世界を作ることができるのだと思います。

日本の観客の皆さんが私たちの牽牛と織女、そしてカササギとカラスに出会い、幸せな時を一緒に過ごしてくださることを願っています。そして両国の芸術家たちが今後も新たな出会いを通して、エネルギーに満ちたさらなる創作活動を進めていくことを願っています。

国際交流初心者の一韓国人プロデューサーが始めた無謀過ぎる企画に、快く応じてくださった演出家の SAKATANI Hitoshi さんをはじめとする「２０２３烏鵲橋プロジェクト」チームのすべてのメンバーに感謝し、日本での演劇交流実現のためにご尽力くださった方々に、心より御礼申し上げます。

この瞬間を共有するすべての皆さんが幸福でありますよう、そしていつかまた皆さんと、懐かしい思い出とともに、出会えますように。

２０２３年７月七夕、そこに在る貴方に空の川を越えて会いに行きます。

감사합니다

■**ホン・ミンジン**（洪玟珍／홍민진）
演劇プロデューサー、劇団山企画チーム長。２０１３年から劇団山プロデューサーとして活動しながら、劇団イル、劇団テアトル春の日、旌善アリラン文化財団などとともに演劇活動に参加。２０１７年、旌善アリラン文化財団と旌善アリランを盛り込んだミュージカル「アリラン」に制作プロデューサーとして参加。２０１９年、韓日演劇キャンプにプロデューサーとして参加、国際交流への関心を深める。２０２０年、韓日共同創作活動を企画するも新型コロナ感染症蔓延により断念。２０２１年、韓国江原道旌善の芸術家とカザフスタン・アルマトイの高麗人二世の芸術交流にプロデューサーとして参加。２０２２年、韓日の芸術家が共同創作を通じて互いを理解するプロジェクトを立ち上げたいと考え「２０２３烏鵲橋プロジェクト」を企画。

仲間とサムギョプサル

韓国側演出家
ソ・ウォンジン

「２０２３烏鵲橋プロジェクト」は近くて遠い国、韓国と日本の青年芸術家が、共通した文化資源を素材に作品を作っていく共同創作活動です。韓国の企画者と製作陣、日本の演出家と俳優陣が素材開発から創作、作品発表に至るまで、一連の過程を共にし、芸術活動によって両国の芸術現場をつなぐ架け橋になろうとする試みです。

このプロジェクトは、韓国と日本にある共通の昔話の中から「牽牛と織女（七夕）」を素材に、韓国と日本の芸術家が異なる視線で、多様な観点から接近し、一つの作品を作っていく共同創作活動なのです。

昔話の中の牽牛と織女を繋げたのが烏鵲橋だったように、コロナや国際情勢によって沈滞した交流の扉を、韓国と日本の青年芸術家が芸術活動で開くために企画されました。

■**ソ・ウォンジン**（徐元晋／서원진）
演出家。劇団山演出部、劇団美酔人代表演出、ソウルカトリック演劇協会舞台監督。２０１３年、マイムパフォーマンス「Green T」制作／共同演出（劇団美酔人）。２０１５年、パフォーマンス「生活戦線」制作／共同演出（劇団美酔人）、コンサート「Hello? Indie」演出。２０１６年、朗読劇「あなたに私の気持ちがわかるなら」演出（劇団美酔人）。演劇「プレゼント」演出助手（劇団山）。２０１７年、演劇「おしゃべり」演出（劇団美酔人）。演劇「チャンポン」演出助手／舞台監督（劇団山）。２０２１年、演劇「ロマンティック・ホリディ」演出（劇団美酔人）。２０２２年、演劇「ルーチェのブラックホール脱出大冒険」演出（国立光州科学館）プロギングシアター「Fall in 月平」演出（劇団アシンアートカンパニー）

何かが起きるときというのは大抵突然だ。今回の話も知り合いの韓国人演出家から、「日本で公演をやりたい後輩がいるから連絡を取り合ってみてくれ」そんな一文が突然に来たことから始まった。

自分は高校時代にアメリカに留学した経験がある。アメリカはメルティングポットと言われるとおり、多くの人種、多くの民族、多国籍文化を内包した国家だ。しかし、みんな仲良く暮らしているわけではない。差別は存在している。有名な所では黒人差別がある。最近、ずいぶんと話題になるようになったアジア人差別も当時からしっかりと存在していた。自分もそれを経験することになった。

正直に言って、差別というのはどうやって対抗したら、向き合ったらよいのか当事者には分からない。解決方法などないのではないかと思うほどに。しかし、その体験の中でとても小さな光明を見ることはできた。それは共通体験に関して話をしたとき、お互いの気持ちが少しだけ、ほんの少しだけほどけたという経験だ。勘違いだったのかもしれない。しかし、今までとは違うペースで、内容で、感覚で話は進んだ。

その経験から自分は、相手と何某かの交流を持とうとしたとき、手っ取り早く壁を越えるには共通体験、つまり一緒に何かをすれば良いと思っている。そんな自分の所に、共に創作活動をしようという話が舞い込んだのだ。断る理由は何一つない。

演劇をやっているのだ。だから当然、作品は自分たちのためだけでなく、それを観に来て下さる観客の皆様のためにも創る。しかし、今回は交流をする機会を得たわけだ。いつもとは違う。いつも以上に楽しめそうだ。

共通体験について話をすること、共通の経験をすること、それはお互いを好きになるということではけっしてない。それは、お互いが同じ人間であることを認識する行為だ。その認識が作品にどんな影響を与え、どんな結果をだすのだろうか。期待と不安が入り交じった最高の気分だ。

さあ、扉を開けよう。開けて中に入らなければ何も得られないのだから。

日本側演出家　SAKATANI Hitoshi

■SAKATANI Hitoshi

FUTURE EMOTION 代表・演出家／劇作家。２０００年より東京にて本格的に演劇活動を始める。フィクションやファンタジーなども描くが、現実世界をモチーフにリアルな世界を描くことに定評がある。代表作には、発掘調査関係者の葛藤をテーマとした「relic」、ＡＶ女優が結婚しようとする姿を描いた「彼女の裏側は何色」、東京新宿を舞台にした意味の無い夢を通して人々が死と向き合う姿を描いた「Get a Life」などがある。通常の東京都内における演劇活動とは別に、２０１７年12月に韓国春川にて、現地の創作集団 Choc.24 に招聘され現地俳優陣と台本のリーディングワークショップを行う。翌年も Choc.24 に招かれ、韓国春川にて韓国の演出家たちと韓国の俳優のための演劇ワークショップを行う。２０１９年10月、韓国春川にて翰林大学日本学研究所主幹、２０１９全国人文週間事前事業、KT&G サンサンマダン春川製作支援事業 ART IN SANGSANGMADANG に招聘され、演技ワークショップに参加した。また、「ポスト帝国主義」をテーマにしたシンポジウムにパネリストとして参加、演劇公演において『6月26日』を上演。

そこに在るはずの貴方に
～空の川を越えて～

そこに在るはずの貴方を空の川を越えて探しに行きます！

<2023烏鵲橋プロジェクト>は、韓国と日本の共通した説話である「牽牛と織姫（七夕物語）を題材に、様々な観点からアプローチし、一つの作品を作っていくという日韓芸術家の共同創作プロジェクトです。
2023年7月、天の川を挟んだ牽牛と織姫、そしてカササギとカラスの物語が真夏の雨に乗って皆様の元にやってきます。

天の川が繋いだ縁、雨と共に降りてきた美しい昔話！

楽しそうにとても楽しそうに、都心を飛び回るカササギとカラス。彦星と織姫の星座を持って生まれた転生者を探し飛び回る。
2023年東京、雨が降るある日、生活に疲れた一人の男と旅行に来た一人の女がバス停で出会う。この二人が近づくと雨がもっと激しく降り始め…雷が鳴る。
ついに見つけた！　彦星と織姫！　カササギとカラスは待ちわびていた彦星と織姫に記憶を取り戻すため、昔話を始めるが…

そこに在るはずの貴方に、空の川を越えて
昔々、鳥や人々の祭りが7月の雨を合図に始まります。

CREDIT

企画/Producer
ホン・ミンジン

演出
SAKATANI Hitoshi
ソ・ウォンジン

原作
口伝説話

再構成
SAKATANI Hitoshi
チャン・テジュン

脚色
ソ・ウォンジン

作曲/通訳
パク・イヒョン

音響
アン・セウン

照明
イム・ヒョソプ

通訳
森喜久子

舞台監督
小林勇太

振付／動作
イ・ジュヒョン

デザイン
ユン・イナ

演出助手
ビョン・ジニョン
チョ・ウンギョレ

広報
キム・リョンヒ

ファシリテーター／写真
チャン・テジュン

サポートメンバー
櫻井麻樹
松葉祥子
竹本渉
キム・ギテ

CAST

キム・ギョンファン

チェ・ソンファ

林優里

辻真由

公演期間
2023年7月7日（金）～8日（土）

開演時間
7月7日（金）19：30
7月8日（土）13：00, 17：00

チケット料金
￥3500（前売・当日券ともに）

チケット発売日
2023年5月28日（日）
https://www.quartet-online.net/ticket/2023ujaku

※受付開始は開演50分前
※開場は、開演の30分前

お問合せ
info@femo.info
http://femo.info
090-1294-4712

公演会場：キーノートシアター
東京都 荒川区 西日暮里 1-1-1 パレスいしかわ B1F
https://keynote-theater.tokyo/

最寄駅：［京成本線］新三河島駅（徒歩2分）、［東京メトロ千代田線］町屋駅（徒歩7分）、［JR山手線］西日暮里（徒歩13分）、［JR常磐線］三河島駅（徒歩6分）

第２回

風立ちぬ 東アジア気象地図

「江華島事件」 ～日本の影は薄く、朝鮮の英雄もいなかった

砲弾により損傷したままの砲台城壁

韓国江華島の草芝鎮砲台前で解説する日本人女性Ａさん

下川正晴

元毎日新聞論説委員
元ソウル・バンコク支局長

1949 年鹿児島県生まれ。元大分県立芸術文化短大教授。
著書／『忘却の引揚げ史』『日本統治下の朝鮮シネマ群像』『引揚げと占領の肖像 BEPPU』『ポンジュノ』『私のコリア報道』など。

５月初め、韓国北西岸の江華島を三十数年ぶりに再訪した。ソウルからバスで約２時間ほどかかる。朝鮮史の数々の歴史舞台になった島だが、日本人には日朝間の武力衝突事件「江華島事件」（1875）が有名だ。２年後には、その150 周年を迎える。前回のコラムで紹紹介した「台湾出兵」（1874）と並んで、東アジア近代史を彩る重要な事件である。

「日韓近代史」の記述は、江華島事件から始まるのが定番だ。

朝鮮西岸海域を測量中の日本軍艦「雲揚号」が、漢江河口に位置する江華島の草芝鎮砲台と交戦し、隣接の永宗島を占拠した事件だ。これを契機にして翌年、朝鮮王朝が開国に合意した日朝修好条規（江華島条約）が締結された。

事件を詳述した岩波新書『韓国併合』（1995）は、日朝間の江華島戦闘について「いまでも草芝鎮の城塞には、えぐられた石垣や幹を折られた老松に弾痕が残されているが、これはこのときの激戦の跡を伝えるものであろうか」と、思わせぶりに書いている。日本軍の砲弾による損傷かと言わんばかりの表現だ。

だが、今回の取材旅行で会った現地案内係の女性Ａさんは、「それはよくわかりません」と首をかしげた。「草芝鎮砲台は、雲揚号事件以前の 1871 年にも、アメリカ艦隊に砲撃されています。だからその砲弾の跡かも知れないのです」。合理的な解説に、僕は驚いた。

「韓国で草芝鎮砲台が注目され始めたのは、日本軍の砲撃から 70 年も経過した解放後のことです。だから、弾痕が米国によるものか、日本軍によるものか、よく分からないのです」と明快である。

さらに仰天したのは、彼女が地元の韓国人男性と結婚した新潟県出身の日本人であったことだ。２人の息子を育て上げたという。「ここは日本からの観光客も少なくない」。だから史実に沿った歴史案内が必要とされるのだ。『韓国併合』の著者である海野福寿氏（元明治大学教授・故人）は僕の知人だが、この本には筆が滑り過ぎた表現が少なくない。改めて読み直してみると、日韓をクローズアップした二国間史観である。そういう意味では、Ａさんの歴史認識のほうが優れているのではないか。

江華島の北部にある「江華島歴史博物館」の展示も、意外なものだった。

島の中心部からバスで約 20 分。新築の中規模博物館である。ここでは日本と朝鮮の衝突事件以前に、フランス（1866）と米国（1871）による、より大規模な「もう２つの江華島事件」があったことの重要性に気付かされる。

博物館で最も派手な展示は、米国艦隊による江華島攻撃だ。草芝鎮砲台から北へ約６キロにある広城鎮砲台で起きた米朝間戦闘の模様を、ミニチュアで再現している。米商船ジェネラル・シャーマン号を焼き討ちにし、乗組員全員を殺害した事件（1866）への報復として、米国は５隻からなるアジア艦隊を出動し、江華島を攻撃した。この時の戦闘で朝鮮側は 240 人の戦死者を出したが、米国側も 15 人が戦死した。大院君時代に特徴的な「朝鮮軍の善戦」の一つである。江華島歴史博物館の歴史認識は今、この抗米戦争を重視するのだ。

フランス人神父殺害の責任を追及したフランス軍の江華島攻撃も、同様な戦闘状況の再現展示がある。そして仏米両国との戦闘で「英雄的な戦い」を指導した朝鮮軍の将軍２人の肖像画が、その事績とともに顕彰されている。

日本による「江華島事件」展示は、江華島条約の締結シーンのみである。草芝鎮砲台や永宗島の戦闘では、朝鮮側の被害（朝鮮側死者 35、日本側死者１）ばかりが目立つせいでもあろう。「朝鮮の英雄」もこの戦いでは存在しなかった。現代韓国に横溢する反日民族主義からすれば、それは不都合な史実ですらある。

日本と韓国の視点からだけで見た「日韓関係史」では、双方の視線も食い違うし、実際に起きた「歴史の全貌」を捉えられないということだ。

「草芝鎮の戦闘で朝鮮軍が弱かったのは、当然ですよ」と断罪するのは、朝鮮日報の朴鍾仁記者（歴史担当）である。「大院君から実権を取り戻した高宗が自己保身のために、江華島の防衛軍を首都の漢城周辺に移動させたからです」と手厳しい。

朴記者には『売国奴高宗』（2020）といタイトルの著作がある。現代韓国における高宗糾弾派の急先鋒である。高宗再評価論が台頭したわずか２０年前の韓国では考えられなかった主張が現在、主要紙上で展開されているのだ。

◇　◇

久しぶりに江華島を訪問した僕は、「仏米日による３つの江華島事件」という史実を再認識することで、朝鮮開国史に対する思い込みを大きく修正させられた。

要約して言えば、「朝鮮開国」から「韓国併合」にいたる日韓関係史は、朝鮮王朝の弱体化と米欧列強の監視と牽制と、認容の中で進行した。そういう歴史認識が、実際に起きた史実に近いと思われる。構想作『台湾と韓国の歴史認識／元ソウル特派員が考える』（仮題）で詳述するつもりである。

古代のロマン

菟道稚郎子（うじのわきいらっこ）の死の謎 3

桓武天皇は、母方（高野新笠）の出自を、武寧王の子・淳陀 太子の子孫としていますが、武寧王は、百済王・腆支の子孫なので、桓武天皇は、腆支の子孫ということです。このようなことから、日本書紀が百済寄りに編修され、腆支が仁徳天皇と履中天皇という二人の天皇として表されていると思われることにも納得できます。

そして、藤原不比等が編纂した「日本紀」は、不比等が新羅王・武烈（金春秋）の子と推察されることから、新羅寄りだったことは容易に想像できますが、残念なことに、不比等の「日本紀」は、桓武天皇によって百済寄りに改修されてしまったのです。

◆ウジノワキイラッコを祀っている神社から、死の真相を探る

ウジノワキイラッコを祀っている神社は、現在のところ、次の三社を確認しています。

①京都府宇治市の「宇治上神社」「宇治神社」
②神奈川県平塚市の「前鳥神社」
③栃木県下都賀郡野木町の「野木神社」

それぞれの神社の由緒は、次のとおりです。

①宇治上神社・宇治神社＝ウジノワキイラッコの離宮があった所。
②前鳥神社＝ウジノワキイラッコが一族を率いて相模の地に移り住み、後に祭神として祀ったことに始まる。祭神は、菟道稚郎子・大山咋命・日本武尊。
③野木神社＝仁徳天皇の時に、奈良別（崇神天皇の皇子・豊城入彦の 6 世孫。下毛野国国造・田道命の子？）が下野国造として赴任した際、ウジノワキイラッコの遺骸を奉って、当地に祀ったことに始まる。その後、坂上田村麻呂が蝦夷征伐からの帰途、現在地に社殿を造って遷座（神体の御霊を移すこと）したという。祭神は、菟道稚郎子・誉田別命・気長足姫命・宗像三女神。

なお、この神社の近くに「だいてばこ広場公園」がありますが、「だいてばこ」は、漢字で書けば「大手箱」です。この場所に宮殿があったとされています。

これらの神社の由緒から、次のように推測されます。

①ウジノワキイラッコは、宇治にある離宮に住んでいた。
②ウジノワキイラッコは、自死ではなく、殺害された。
③オオサザキのミコトが、ウジノワキイラッコの政権を奪った。
④ウジノワキイラッコは、東国の現在の平塚市あたりに逃げた。
⑤仁徳天皇になったオオサザキのミコトは、ウジノワキイラッコが東国の相模の地に隠れ住んでいることを知った。
⑥仁徳天皇は、奈良別を下野国造に任じると、ウジノワキイラッコの殺害を命じた。
⑦ウジノワキイラッコを殺害した奈良別は、その遺骸、あるいは遺灰を納めた大きな手箱を、赴任地の下野国まで運んで来た。
⑧大きな手箱を、国造の館の傍に埋葬して祀った。
⑨桓武天皇の時、坂上田村麻呂が蝦夷征伐からの帰途、今の野木神社の場所に社殿を造り、ウジノワキイラッコの御霊を移した。

このように、前鳥神社と野木神社の由緒には、ウジノワキイラッコの死の真相についての重要なヒントが隠されています。ウジノワキイラッコが、一族を率いて相模の地に移り住んだという伝承が真実であったら、自死しておらず、オオサザキのミコトから逃れて、隠れ住んだということになります。

◆ウジノワキイラッコの墓は、どこ？

ウジノワキイラッコが 390 年頃に天皇に即位し、420 年頃に、オオサザキのミコトによるクーデターで政権を追われた可能性が非常に高く、その後、相模の国で奈良別によって殺害されたと推察されます。では、ウジノワキイラッコが天皇だったとしたら、その天皇陵はどこにあるのでしょうか。

栃木県の野木神社の由緒から、ウジノワキイラッコの遺骸か遺灰が野木神社に埋葬されている可能性がありますが、天皇陵がどこかに築かれているはずです。そして、仁徳天皇によって手厚く御霊を供養された上で、立派な陵墓が築かれていたはずです。

父の誉田天皇の陵は、現在、大阪府羽曳野市にある誉田御廟山古墳に比定されています。その誉田御廟山古墳の真西の方向の、堺市北区金岡町にある大泉緑地が非常に気になっています。総面積 970,000 ㎡にも及ぶ広大な緑地ですが、このあたりは、昔、南清水と呼ばれ、溜め池や田畑が広がっていたとのことです。　　つづく

文／橋田恵子

朝鮮国民女優・文藝峰の誕生

日本植民地下の女優形成史

BOOK

「おわりに」にかえて より抜粋

.... 二十一世紀に入ってからは、日本植民地時代を多様な分野で新しく解釈しようとする脱植民地の立場の理論が登場する。植民地支配を経験していない第二世代と第三世代が社会に登場したことも影響している。彼らはそれまでと違う新しい方法で韓国の近代を解釈する。彼らにとって近代は、世界体勢というグローバルな視点に立つうえで重要な軸であり、「近代」を固有で重要な現象の一部として受け入れている。西欧と植民地とは、同時に発現した近代性の多様な「屈折」を表現するだけで、西欧＝普遍、植民地＝特殊という図式は成立しておらず、最初からすべての近代とは必然的に「植民地近代」であると宣言した。彼らは、ポストモダニズムの方法論として日帝強占期を再解釈していて、究極的にはその時期を「民族」ではなく、「個人」と「社会」を中心に読み返すべきだと訴えるのである。

　このような経緯で、韓国での日本植民地時代の痕跡は、収奪だけだったとする歴史の記憶から徐々に変容していった。それに伴い、一九四五年の解放以後に構築された韓国映画史から、日本による植民地時代を峻別しようとする意識も薄まっていく。それは、朝鮮人の手になる映画制作の歴史だけを韓国映画の通史として認めようとするものではなく、朝鮮映画全てを韓国映画史として捉えようとする思考である .....

発行：青弓社
定価 4,000 円＋税

＜著者略歴＞

李瑛恩（イ・ヨンウン）

1984 年、韓国・ソウル生まれ
日本大学芸術学部映画学科演技コース卒業
日本大学大学院芸術学科研究科修士課程修了、同博士課程修了
専攻は日本統治下朝鮮映画・演劇・女優論
論文に「日本統治下朝鮮における女優形成の史的研究－女優・文藝峰を中心として」（日本大学博士論文）
2006 年に韓国でイ・アイの芸名で芸能界デビュー。出演した映画に『大韓民国１％』『ダイナマイト・ファミリー』（日本公開タイトル）。
ドラマに『私も行く』『大王四神記』『ドラマスペシャル－梳き櫛』『自由人李会営』『大王の夢』『一途なタンポポ』など。
演劇に『私の心の中に全盛期』

余白手帖